



1. 建設とみどり
2. 公害と報道
3. 航空機時代に向けて

1 過日^{ヒルゼンダイゼン}蒜山大山公園のトールロードをめぐる機会に恵まれ、紅葉のかかった見事な原始林に魅せられ山を降りた。

宿の一室でふと新聞に眼をやると、南アルプスの森林道路が大きく取り上げられているのが目にはいった。道路の開削により沿道の森林がすっかりそこなわれたという主旨の記事であったが、いま見てきた見事なトールロードと十二分に保護された美しい原始林からなる景観とのあまりの相違に嘆きに近いものを覚えた。過去はともかく、自然は現在かけがえのない財産ではなからうか。建設に破壊は付随する宿命をもつものではあるが、失えば二度とは戻らぬ国民の宝には慎重な態度である必要が感じられる。かつてヨーロッパに遊んだ折にも、十分に保護された自然とこれを楽しむ人々の姿に感銘を受けたが、そのときの記憶が甦った。

保護はたしかに金のかかるものであろう。しかし、無意識のうちにそれ以上に価値あるものを破壊しているならば、これは経済の原則にもおとることになる。このような場面に遭遇する機会が多いわれわれ土木技術者は、現況を深く認識し価値判断を誤ることのないよう心する必要が痛切に感じられる、今日このごろのように思われる。蒜山大山トールロードの計画および実施者に敬意を表したい。 [C]

2 大気汚染、ヘドロ、水質汚濁、排気ガス、交通渋滞、交通事故。おびただしい公害追求のキャンペーン、公害情報の洪水である。人間が人間らしく、与えられた環境をよくしようという願いは万人共通の原点であるはずだ。だれが好んで害毒を流すだろうか。公害にも軽重がある。

要は問題意識のポテンシャルが十分でなかったことを恥じるだけである。繁栄の象徴のようにクルマを乗り回し、人を轢殺し、不幸のどん底につき落とし、泣いている人がいるように……。

いま必要なことは、各人が心の奥にいま一度、人間という言葉の意味と、いかに振舞うべきかを真剣に考えるべきである。原始社会になれば公害もないだろう。公害がうるさくなつたのは、世界の先進工業国なみになった証拠である。わが国は工業立国の出発点自体を放棄するわけにはゆくまい。これから大事に、前向きと後向き^{（注）}の対症療法を創造して実行してゆくことである。それにしても、公害の報道をみるにつけ、背筋が凍る思いがしたのは、マスコミを先だつにして、全国各地に火の手のように広がった反対運動である。あらかじめ用意した資料をマスコミの手段を通じて大衆操作をしたら、いまさらのように、今後われわれの生活する社会で、最も問題になるであろうものを知った思いである。個人は完全に自由に考える機能ももちえるだろうか。公害キャンペーンをみるにつけ、現在、直面している問題の重さを二重に感じた次第である。

[S]

3 成田空港の土地収用調査もいよいよ大詰の段階に迫った。地元住民の抵抗も一段と激しい。これは、情報化社会を迎えるわが国の基幹的事業の推進と市民の権利、農民の土への執着との葛藤の一つの縮図である。

従来ややもすると押えられがちであった日本人の権利に対する主張が、最近さまざまな面で活発になってきた。当然であろう。公害に対する最近の動きにも、その一面がうかがえる。しかし、国という社会レベルで必要とされる基本的な事業がいくつかある。それらは、ときには市民の権利を制約し、阻害する。社会の国際化、情報化、あるいはモビリティの高い生活への国民の欲求が進む中で、成田新空港の建設はそのような事業の一つであろう。世界の一大拠点としての日本の玄関として、その必要性はもちろんのことである。さらに、東京圏の空港の拡充によってこそ、全国土の航空ネットワークの充実がはかれるという観点からも、不可欠の事業である。今日、その推進は一刻も急がねばならない。

今後、各地の空港整備事業は、騒音と用地問題にからみ、地域住民の生活権利の主張と航空時代への脱皮という命題とを、どう調整させようかという局面を各所に展開させることとなる。その際、地元住民の犠牲と苦悩に対して、補償などの対価が過分にすぎることはないという配慮が必要であろう。 [J]

Vol. 55-7号から9号までの本欄の執筆は、下記編集委員が担当しました。

J. 布目 恵造, S. 門田 博知, C. 山本 弥四郎